

EurekaXIII

六年制通信 No.3 令和7年4月18日(金)号

小さな失敗を大切に

以前小テストの効用について話したことがあります。単語テストが一番わかりやすいと思いますが、5分ほどでできるチェックテストね、あれは君たちが小さなガッツポーズを経験するための絶好の機会なのだという話でした。勉強は12時間を二日間続けるよりは、2時間を12日間続けるべきで、つまりなるべく習慣にするように心がけなければいけないのです。一旦馬力の勉強は意味ないと言っていいでしょう。その、習慣にする方法の一環として小テストが有効なのですね。これをうまく利用すれば「毎日勉強する習慣」がつくはずですよ。ですから小テストをしてもらえるというのは、君たちにとって本当にありがたいことなのですよ。ちなみに私が中高生の頃は単語テストなどなかったし、単語帳も指定されていませんでした。そのあたり、すべて自主性に任されていました。ですから高1で五千語を覚えた強者もいれば、全く勉強しない怠け者もありました。放っておかれるとだいたい両極端に走りますね、人間は。君たちは幸せなのですよ。小テストで小さなガッツポーズを積み重ねると、いわゆる成功体験が生活の一部になりますから、勉強にリズムができます。そのリズムを大切に机に向かうことを毎日の習慣にしまえば進路希望をかなえる基礎は出来たと言っていいでしょう。これ、すでに感じている諸君もいるはずですよ。

しかし、小さなガッツポーズが自己肯定感を高めるために必要なのは確かですが、同じくらい小さな失敗も大切なのです。授業中に当てられて答えられないなど、私などしょっちゅうでしたが、あれなんか小さな失敗ですよ。ところが、当てられて黙ってしまうと、失敗する機会も失ってしまいます。答えて間違えるというのは、少なくとも答える内容を限られた時間の中で、その場で「決断した」ということです。これが重要なのです。決断しないで誰かほかの人の解答を聞いているだけではもったいないのですよ。みんなの前で間違えるという経験は決してマイナスにはなりません。

Experience is the name everyone gives to their mistakes.という文章を私は昔習いました。「経験とは誰もが自分の失敗につける名前のことである」、つまり、失敗したら、その失敗に「経験」という名前をつけなさい、ということです。『サロメ』の作者オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の言葉ですね。なぜこの英語を覚えているかというと、単数の everyone を複数の their で受けているからです。動詞は gives ですから三人称単数形でしょ。本来 everyone は he で受け、従って his mistakes が伝統的には正しいのですが…。19世紀の詩人が their を選択するのかなあ。ま、いいけど。オスカー・ワイルドのように失敗を前向きにとらえることができれば、私たちは成功しよ

うと失敗しようと学ぶことができますね。どちらかと言えば、失敗から学ぶ方が忘れないと言われていますが、私もそう思います。

しつこいですが、自分で答えないで誰かが答えるのを待っているとせっかくの「失敗する機会」を失うことになります。それに、答えないでいることで一見失敗していないように見えますが、それは実際に失敗するより良くないことなのです。ある意味、自分をだましているのですからね。だから教室ではどんどん間違えなさい。

かつて司馬遼太郎が言っていましたが、「人間は人なみでない部分をもつということは、すばらしいことなのである。そのことが、ものを考えるばねになる」（「洪庵のたいまつ」より）のだ、と。これ、本当にその通りだと思います。誰もが同じではないから、誰もが同じような能力を持っているわけではないから、人は必ず失敗します。もちろん取り返しのつかないような大きな失敗はしてはいけませんが、勉強の過程で起こる失敗は小さなものです。子どもが小さな失敗を山のようにしながら成長していくことは君たちにも十分心当たりがあるでしょう。生きるということは、その小さな失敗を積み重ねることだと言ってもいいかもしれません。特に若いうちはそうですね。大人になってな思い出してはため息の出るような失敗を若いうちはするものです。

私は君たちに、うまくいくことから、うまくいかないことから、双方から学ぶことのできる青年になってほしいと思っています。うまくいっても驕らず、うまくいなくても腐らず、頑張って勉強を続けましょう。

今週のおすすめ

・藤岡陽子 『陽だまりのひと』 （祥伝社文庫）

今年の2月でしたか、NHKで「リラの花咲くけものみち」という、北海道を舞台に獣医師を目指す若者たちを描いたドラマを観ていたのですが、その原作者が藤岡さんです。あのドラマ、よかったなあ。リラはライラックのことですが、君たちは見たことがありますか。ああいう光景は北海道ならではのしょうね、きっと。

『陽だまりのひと』は初め『テミスの休息』として出版されましたが改題したようです。改題しない方が「テミス」が入っているので裁判官か弁護士かあるいは検事が主人公だとすぐわかるのにね。弁護士1名と事務員1名の小さな弁護士事務所が舞台上、六つの物語が収められています。どれもいいのですが、交通事故の話が印象に残っています。ほんと、事故だけは他人事ではないですね。今、松阪は本当に危ない運転の車が多いと思うので、君たちも気をつけないと。

少し紹介すると…、事務員には高校生の息子がいて、息子にはガモッチャンという親友がいます。その母親が交通事故を起こすのですね。ガモッチャンは母の再婚相手を嫌っています。損害賠償のためにお金が必要なのですが「父」に頼りたくないガモッチャンは学校を辞めて働こうとします。事務員の息子はそんなガモッチャンに何ができるでしょうか。事務員に好意を寄せている弁護士は彼女の息子の相談に何とアドバイスをするのでしょうか。考えさせられる物語でした。

BGMは 庄野真代 の ルフラン でした…。